秋高同窓会だより

発行者
秋田県立
秋田高等学校同窓会

印刷所
秋田マイクロ写真
印刷株式会社

甲子園に校歌流れる

母校、初戦で快勝

後半粘りで高松西下す

春の選抜高校野球大会に出場した母校チームは、開会式直後の一回戦で香川県代表の高松西高と対戦、前半こそリードを許したが、後半持前の粘りを発揮して見事に3－2で逆転した。

この日の甲子園球場の三塁側アルプススタンドには、はるばる秋田から駆け付けた応援団、塩田同窓会長らの同窓生それに近畿県人会のメンバーなど約八百人が陣取って声援していた。

試合は滑り出し調子が出ずに一、二回に一点ずつ許して苦しい展開となった。しかし中盤から徐々に落着きを取り戻すとともに反撃を開始、八回に一点を返した後、九回表高田主将の左翼席に入る同点ホーマーで完全に押せ押せムード、さらに貴重な一点をもぎとってそのまま押し切った。

秋高側の応援席はあまりに鮮やかな逆転劇に文字通り狂喜乱舞していた。やがて校歌の「天上はるか」が場内に流れると、スタンドは静まり返り、起立した同窓生達が感涙にむせびながら口ずさむ姿が印象的だった。

続く二回戦は、岡山南高と対戦健斗したが、エース斎藤が指を痛めるアクシデントがあってリードされ、味方の反撃手も牧野の本塁打による一点にとどまり涙をのんだ。

▶見事な逆転劇で一回戦快勝の母校ナイン……感激しながら校歌の斉唱。

▲竹内部長らから甲子園の報告を聞く。

▶母校野球部の甲子園での活躍を祈り秋田銀行阿部常務から畑沢校長に金一封が贈られる。

観戦記

不運、斎藤の負傷

◇…実力出し切れなかった対岡山南戦…◇

石井　仁（S42卒）

明暗を分けるアクシデントが四回表に起きた。立上りから制球に苦しむエース斎藤新が突然この回からセットポジションで投げ始めたため、だれもが「おや？」と首をひねった。前の試合が長引き予定より一時間半も遅れて夕刻四時すぎから始まった二回戦第一試合対岡山南戦。

三月とはいえ日陰をわたる六甲おろしはまだ肌に冷たく、薄墨色の空は今にも泣き出しそうで、劣勢に沈みがちな一塁側アルプススタンドの空気をいっそう重苦しいものにしていた。斎藤にきのうまでのスピードはなく、スタンドから見ても明らかにボールとわかる棒球が続く。何か異変があったにちがいないと思いながら、真相を知る由もないまま彼の力投に注目した。ボールの手離れがいつもより早く球道が定まらず、苦しまぎれにストライクをとりにいったところを狙われて、この回打者十人の猛攻、本塁打を含む五本のヒットを浴びて一挙に四点を失ってしまった。その裏、秋高に初ヒットが生まれて無死一、二塁と絶好の反撃機。ここで一本出ていれば試合の流れはどう転んでいたかわからない。だが期待された四、五、六番のバットからついに快音は出ずじまい。これで相手は勢いづき、逆に秋高打線は焦りの色を深めつつ岡山南のエース加百の術中にますますはまっていってしまった。

この四回の攻防がこの試合のすべてであった。

ゲーム終了直後、私は斎藤新不調の真相を確めるのと、それらのインタビューをとるため、出口に群がる人波をかき分けて選手用通路へ急いだ。テレビにアップで映る勝利校の晴れやかな代表インタビューを横目に、秋高ナインはさすがにがっくりうなだれて長イスに腰かけていたが、その中にめざす相手が血染めのティッシュを左ひとさし指に当てているのを認めて私はすべてを悟った。マイクを向けながらその指を見せてもらったら、上端の腹の表皮が破れていて血が止まらない。試合中、流れ出る血を拭ったのか、純白のユニフォームの左太ももだけが赤く染まっていた。三回途中からのアクシデントだったそうだが、それを聞いて改めてスコアブックに目を落とすと「嵐の四回」が過ぎると五回以降は散発三安打に抑えているのに気がついた。

一年生ながら見上げた根性と舌を巻きながら、四日前の開幕戦で重圧をはね返してやってのけた九奪三振の快刀乱麻を思い出し、この投手はまだ二、三度甲子園のマウンドを踏むかもしれない――ふと、そんな予感が突きあげてきて〝次〟への期待に胸が高鳴るのを抑えきれなかった。

（AKT秋田テレビ勤務）

盛大に甲子園報告会

寄付金は四千二百万に

春の選抜高校野球大会出場の総締括りとして、その報告会が去る六月十三日、午後六時より秋田ビューホテルに於て、同窓会、PTA、矢留クラブ、選手の父兄、父兄OB、学校の各関係者約百名が参集、盛大に挙行された。

まず、同窓会長の塩田募金委員長、学校長から相次いで募金のご協力に感謝のことばが述べられ、竹内野球部長、小野監督、高田主将からこもごも当時を思い出しながら感慨と夏へ向かっての決意が述べられた。

次いで、事務局より募金決算について説明あり、一五、六二三名の方々より約四、二一六万円のご寄付をいただき、その内約三、〇五四万円を支出、今後の報告書、印刷費、送料などの支出を予定しても、約一、一二〇万円の残金が見込めるとの報告があった。

その後懇談に入り、当時を回想して歓また歓、校歌を斉唱して九時近く解散した。

改めて皆様のご協力に対して厚くお礼申し上げます。

新野球部長に米田氏

竹内氏は60年度で引退

母校野球部では新学期から米田進氏が部長に就任した。

竹内一朔前部長が六十年度いっぱいで引退したためで、竹内氏は五十五年度から野球部長に就任、大久保前監督と名コンビを組んで五十七年夏、今春と二度にわたって甲子園出場を果たしたほか、現在早大の四番打者として活躍する石井浩郎選手など数多くの名選手を育てた。

476人が仲間に

入会式

＝高階氏が歓迎の言葉＝

秋田高校第三十八回の卒業式は例年どおり三月七日、午前十時より県民会館で挙行され、普通科四三二名、理数科四四名の計四七六名が畑沢潤一校長から卒業証書を授与された。

卒業式後、同窓会入会式が行われ、佐藤孝氏（昭38卒）の司会のもとで、昨年八月の総会で選任された塩田雄次新会長（昭5卒）が先ずあいさつ。恒例の歓迎のことばは、高階幸道氏（昭30卒）で、自らの職場体験を通して青年の生き方を力強く説いて拍手喝采を浴びた。

引き続いて塩田会長から記念品―校章入りのネクタイ・ピン（女子はネックレス）が贈られ、新入会員代表の折野公人君の若者らしいきびきびした謝辞。最後に全員で校友会歌を斉唱。盛会裡に入会式を終えた。

六十一年度 定時総会のご案内

会員各位多数のご参会をお待ちしております。

日時　昭和六十一年八月二十四日(日)
　総会　午後四時
　懇親会　午後五時
　（なお午後三時より同所にて支部長会議を開きます）

ところ　あきたくらぶ
　（秋田市中通五ノ二　TEL三三―二一〇一）

会費　五、〇〇〇円（学生　二、〇〇〇円）
　ほか記念写真代　一、五〇〇円

会員各位　県立秋田高等学校同窓会会長　塩田雄次

天上天下

「秋高百年史」などによると、本同窓会が発足したのは、大正四年八月、その趣意書には、人材発掘、後進の育成のためという（同窓会だより21号参照）。世界平和に暗雲漂っていた当時、日本の将来を憂いた諸先輩の熟慮のうえの行動だったろう▼何やら今の社会情勢と共通点があるように思える。もっとも日本を取り巻く世界情勢はまるで異なる。また、人材育成は時代の区別なく必要欠くべからざることである。だが、今の秋田ほど将来の担い手を渇望した時期はあまりない▼全国唯一の人口減少県。それに伴う県勢の沈滞……打開策はいくつか考えられるが、いずれもその基本となるのが「人材」である。秋田に活性化を取り戻すためにも今こそ人材育成が急務なのである▼創立百十余年の伝統に加え、県下随一の進学校を誇るわが母校。それに学ぶ後輩達が郷里の中枢にならないで秋田の沈滞ムードを一掃することができるだろうか。われわれ同窓生の使命はますます重大である▼進学、就職はじめ教育環境は、ひと昔前とは比較にならないほど厳しくなっている中でも後輩達は健闘している。その最も良い例が今春の野球部のセンバツ出場である。私立校や実業校が全盛を極める高校野球界で数少ない進学校の母校チームが堂々と甲子園で校歌を歌って来たのだ。先輩としてこれほど痛快なことはない。▼ひ弱になったとか、根性に欠けるとか戦後の青少年に対する批判は少なくない。しかしわが後輩達は、われわれの中学、高校時代と同じように「大志」を抱き、将来の飛躍を夢見ているのである。その芽はつぐんではならない。同窓会創立当時の先輩達の精神を生かすためにも今こそ、われわれ同窓生仲間の結束が必要である。

下刈りの相談も
五年ぶりに学校林視察

昨年より懸案となっていた仁別の学校林視察が、去る五月二十四日（土）会長、校長以下総勢二十四名参加のもとに五年ぶりに実施された。

実は、昨年計画しながら時期を失したので、今年は関係方面と早目に連絡をとり、同窓会員にも常任理事など七十数名に案内、多数の参加を期待したのであるが、予想外に参加者は少なかった。

駅前の○番線から、マイクロバスで午前十時に出発、途中学校関係者を校門前で乗せて、約二十分で現場に到着、仁別部落会長以下の代表者と落ち合い、市林務課の佐々木道夫課長補佐（昭30卒）の説明により視察に入る。

昭和三年に先輩達が植林した杉は、直径三十糎位か、亭々と聳える様子に往時が偲ばれた。昭和四十八年の創立百周年に当り、小体育館建設のため間伐した約五反歩と、五十二年の山火事で伐採したところには、五十四年に植林されたとのことで、この部分の杉は、我々の背丈を超える程度で、蔦がからんだりしていた。これらの蔦などを取り除き、下刈も必要との判断で市林務課に依頼することにした。

参加者の中には、暫しわらび採りを楽しむ人もあり、昼前に視察を終了、この機会にレジャーランド、スキー場などをひと回りして見学、丁度昼頃に藤倉山の家の芝生で昼食懇親会に入る。心配された天候は、この頃になってポツリポツリと降り出し、慌てて山の家に移り懇親を続ける。

体を動かしたせいか、少々のアルコールに心地よく酔い、十二分に交歓、次の機会を約して仁別部落の方々と別れを惜しみ、二時頃山の家を後に帰路につき、駅前で解散する。

当日の参加者は、市林務課より課長補佐、市有林係長の二名仁別部落代表者五名、同窓会は会長以下六名、学校より校長以下十一名の計二十四名であった。

▲さわやかに汗をかいて一休み

新会員の入会を祝して

高階幸道

新入会員の皆さん、入会おめでとうございます。ことしは卒業以来はじめて母校の卒業式に参列し同窓会の入会式にあたっては歓迎の挨拶をさせていただき改めて母校の歴史と伝統の重さを痛感し同窓の一員にあることに深い感銘をいだきました。

私たちは、二十七年から三年間ようやく太平洋戦争の後遺症も消えかけ、日本経済も回復期にさしかかってきた頃、秋田駅前の旧連隊の跡地の校舎で高校生活を過ごしました。当時は受験競争も現在のように厳しくなく、精神的には充実した生活を過ごしたと思います。ちょうど二年生のときが母校創立八十周年にあたり、記念館（現在の県立図書館の場所）で盛大な記念式典を行ったのが今も忘れられません。また野球部の甲子園二年連続出場をはじめ、運動部の活躍もめざましく、高橋一郎校長のもと文武両道に青春を没頭させることができたと自負しております。

こうした当時とくらべ、現在の高校生活は多少窮屈なのではと感じられます。これも現代の世相の流れ、反映といえばそれまでかも知れませんが、なにか若者の権利を放棄させられた、没個性的生活を強いられているような思いをもつのは私だけでしょうか。頭の良さだけでなく感受性のある個性を生かした、心身ともに健全な若者をもっと育てるべきでないでしょうか。

新入会員の皆さんのほとんどは本当にありがたいものだと感謝するときが必らずやってきます。皆さんが今日あるのは、両親はじめ多くの人達の援助があってこそひとり立ちできたのであって、これから先は実社会での構成員のひとりとしての自覚をもって自己中心的でなく、広く深く将来をみつめて社会に貢献できる人間として育ってほしいと念願します。

皆さんの母校、同窓生としての活躍を期待し、入会をお祝いします。

（S三十年卒）

諸会計の一本化図る
会長・幹事会 62年度にも実施へ

五月から次々と開催された常置委員会の総まとめの形で、六月二十八日弥高会館に於て、会長、幹事会が開催された。

会長、校長のあいさつの後、直ちに議事に入り、昭和六十年度決算、六十一年度予算、「同窓会だより」特別会計について審議了承、諸会計を一本化して基金とし、その利息、だより特別会計など予算の一般化と連動について考えるべきとの貴重なご意見を頂だい、全員の賛同を得て出来れば六十二年度予算から実施出来るよう今後の手続きをとることとした。

次に、各常置委員会委員長より「委員会だより」にあるような諸提案がなされ、一部修正を加えたものもあるが、大筋に於て了承され、案件によっては理事会に提案することとした。

その後、常任理事会、理事会は合同で、支部長会議は総会の前に開催、引き続き総会に入るような日程が組まれた。

最後に、事務局より学校林視察などの会務報告あり、実りある会に終始した。

常置委員会だより

まず四月十日に、四委員長会議を開催、前年度会の運営について反省、新年度に向っての構想について話し合う。

次いで、四月二十八日合同会議を開催、△総会の持ち方、△年次名簿整備の推進、△同窓会だよりの早期発行、△常置委員会の構成と機能などについて話し合い、具体案については各委員会に付託された。

△企画委員会（五月十二日）

1、委員は、会員の中から会長が委嘱し、会長の諮問（一部執行）機関とすることで一致。

2、総会の持ち方については、当番年次を設ける。開催時期はお盆を退け、八月上旬を予定。

3、「同窓会だより」の配布は、最終的に年次配布とするが、当分は支部にも送る。購読料をいただく方向で検討する。

4、規約（10の2・3）の改正。

△名簿委員会（五月二十三日）

1、名簿の基礎資料（データーベース）作製のため百十周年に作製した名簿を基に、各年次から確認訂正した名簿を提出しもらう。

2、委員の中から各年次担当の世話人を委嘱、必要に応じてアドバイス、相談に応ずる。

3、コンピュータの早期導入について検討する。

△広報委員会（六月五日）

「同窓会だより」二十三号の発行を七月初旬をメドに、その編集方針について打合せ。

△財政委員会（六月二十五日）

1、六十年度決算、六十一年度予算について検討。

2、「同窓会だより」特別会計と協賛広告の依頼について。

3、年次会費の割当金額の検討と卒業○○周年のお祝金の協力について。

以上常置委員会の動静についてお知らせしましたが、検討した具体案については、それぞれの機関を通して決定していただくことになると思います。

最後に、この年度末の異動で学校側委員に若干の変更がありましたので次にお知らせしておきます。

財政　石井直明（S20卒）
　　（大島三代助）
名簿　竹内一朔（S28卒）
　　（石塚　功）
　　大久保正樹（S42卒）
　　成田良実（S54卒）
広報　高橋秀雄（S33卒）
　　（松岡正樹）

㊟名簿委員に二名追加。

事務局報

1・13　秋田市役所羽城会
2・12　野球部選抜出場に決定募金のための常任理事会を開催
2・14　札幌支部総会
2・22　鹿角支部総会
2・22　昭和41年卒業20周年記念同期会
3・5　東肥羽城会
3・6　大館支部総会
3・7　卒業式・同窓会入会式
3・19　横手・平鹿支部総会
3・22　井川支部総会
3・25　近畿支部総会
4・10　常置委員長会議
4・19　新屋地区秋中・秋高同窓会
4・28　常置委員会合同会議開催
5・12　企画委員会開催
5・22　名簿委員会開催
5・24　学校林の視察
6・5　広報委員会
6・13　選抜野球大会報告会
6・14　秋中62期会総会
6・17　農協五連支部総会
6・25　財政委員会
6・25　鹿角支部総会
6・28　会長・幹（監）事会

秋田高校同窓会
近畿支部長
石黒次郎（S6卒）
〒659 芦屋市西芦屋町五—三
電(七九七)一二一—三六〇五

杉山医院
杉山勇次（S3卒）
杉山好広（S32卒）
秋田市土崎港中央4—6—22
TEL45—0678
46—5943

秋田電機建設㈱
㈱ADKソフト開発研究所
取締役社長
近藤英夫（S6卒）
本社　秋田市中通5丁目7番48号
研究所　河辺郡河辺町七曲
東京本部・仙台営業所

渡辺整形外科医院
渡辺佳則（S20④卒）
秋田市千秋矢留町2の5
TEL　34—0611

県会議員
北林照助（S20卒）
北秋田郡森吉町米内沢字薬師下一三六
TEL(二八六)(72)三四二五

ご一報下さい
迅速配達中
㈲高橋酒店
代表取締役
斎藤秀雄（S27卒）
秋田市旭北栄町6—19
TEL62—4917

秋田市議会議員
新岡雅（S25卒）
秋田市新屋扇町八—一一
TEL28—二二六一

秋田市議会議員
三浦量一（S28卒）
秋田市下浜羽川字古堂二四
TEL79—二二二六

秋田市議会議員
高橋智徳（S40卒）
秋田市広面字釣瓶町一四—一
TEL32—四〇七六

山内歯科医院
山内静（S27卒）
〒010 秋田市中通三丁目一—七
電話32—二五二七番

未来に翔く　秋田ビューホテル株式会社
秋田市中通2丁目6—1
近藤信（S54卒）　小野俊哉（S53卒）　小林早苗（S51卒）　杉山靖（S51卒）　佐々木二早代（S49卒）　北川登（S42卒）　川口豊人（S42卒）　高橋栄一（S38卒）　木村勝志（S34卒）　中村康道（S30卒）

就任満一年の塩田会長に聞く

運営は話し合いで 集会をできるだけ多く

塩田会長が八月で就任一周年を迎える。創立百十余年という母校の伝統の重味に加え、校舎改築、会の活性化、センバツ出場の募金など懸案山積の昨今だが、テキパキと難問に取り組むなど見事な手綱さばきを見せる。過日、羽後銀後本店に同会長を訪ね、当面の課題などを聞いた……。

秋田市の真ん中にあるビルの七階応接室で待つと、定刻かっきりに会長がスマートなからだを現わした。失礼ながらどう見ても大正二年一月生まれとは思えないほどの若々しさだ。早速、質問をぶっつける——。

▲若い人達からも活発な意見が出て結構…と語る塩田会長

ホッケーで大活躍

▽昭和五年卒業というと、校舎は根小屋町にあったと思うが

—木造校舎であちこち痛んでいたが、始業はラッパで知らせるなど今でも懐しく思い出す。校庭が広く、朝早く登校していろんなことをして遊んだ。当時は今のようないじめがなかったんだね。

▽平鹿の沼館生まれ。旧秋中生活五年間は下宿住まいだが、この間、スケートを覚え、中学、大学を通してアイスホッケーの選手で活躍した。

—当時、愛称ベロというフィギュアの上手な先生がいた。この先生の努力で昭和三年にスケート部が誕生した。練習は千秋公園の濠だった。このころ慶応のスケート部が秋田市に合宿して、スピード、ホッケー、フィギュアの三種目の模範演技をしてくれたのが印象に残っている。

カベ頭清談会にも

▽慶応大学法学部卒業後、今の三菱銀行の前身、第百銀行に入社、二十八年間にわたり都内で銀行員生活し、三十三年家の都合で帰郷、羽後銀行入りをした。在京当時は東京支部もまだできていなかった時代だけに、同窓会そのものには出たことはなかった。

でも同窓仲間の会合にはよく顔を出した。郷里を離れ、母校の懐しさを肩で感じた一人であったかもしれない。

—同期生にこの種の会合に熱心な人が多くてね。大学関係では「三田秋中会」。現東京支部長の金谷さんらとは、新宿の「秋田」に集まって、よく飲み、昔話をした。だれがつけたのかはっきりしないが、この会を「カベ頭清談会」と呼んだりしてね。もっとも私自身は「カベ頭」にはなったことはなかったのだが……。

▽会長に就任されて一年。印象づけられたことは……。

感激した甲子園

—秋田県人の共通した点かもしれないが、他県より仲間意識が強いと思う。会合には若い人も積極的に出席して熱心に意見を出してくれる。

▽今春は母校の二十一年ぶり甲子園出場で同窓会も盛り上がったが、反面、スポーツは野球ばかりではない…との声も聞かれるが……。

—教育的にはいろんな理屈もあるだろうが、会員みんなが共通の目的を持つのは素晴らしいことだ。甲子園に行ってみてつくづく感じた。

▽同窓会長として母校に注文したいことは……。

—特にないが、今の高校生達が伸び伸び育つような環境づくりをしてやりたい。

▽もう直ぐ就任一周年になるが、今後の運営方針は……。

—会員の集まりをできるだけ多くしたい。みんなで話し合って会を運営する。これが母校を盛り上げることにもつながる。若いころからスポーツは万能。なかでもスケートは中学、大学で鳴らしたばかりではなく、帰郷してからは、県連盟の会長として後進の育成にも尽力した。今は滑ることはないが、その代り毎朝三十分は必らず競歩している。これが年を感じさせない若さの秘けつとみた。三人の子息はすでに成人し、家庭は安子夫人と二人暮らし。

母校の教頭に小徳氏

新屋高校から今春赴任

この四月から母校の教頭に小徳忠男氏（写真）が就任した。

小徳教頭は横手市出身。四十二年から五十八年三月まで母校で教べんをとっていたが、同年三月県教委高校教育課勤務となり、新屋高校の創設準備にあたった。その後、五十九年四月から新屋高校の初代教頭となった後、今春三年ぶりでカムバックした。

同教頭は新設高校から一気に県内随一の伝統校へ赴任したわけで校舎改築など気苦労が多い。いつも自らを引き締めていると語っている。昭和三年生まれ、教科は数学。

互いの健康祝す

26年卒関東地区同期会

第十四回26年卒同期会関東地区会は二月八日(土)、銀座武ずしに於いて、会員四十四名出席し幹事長佐藤二郎君の司会により盛大に開催された。

遠来の春日井尚正君の秋田の近況報告のあと同君の乾杯の音頭で懇親会に入った。

初参加の刈田誠作君の挨拶あり、又ひさしぶりの土肥養一君、佐藤洋三君の顔も見えた。春日井君(秋田)のほか、桑原次雄君寺田実君、尾山和吉君(仙台)、山下直樹君(山形)、川口敏之君(長野)、松田靖弘君（静岡）が遠路はるばる参加し、盛会であった。

最後に三国屋環君の音頭で校歌を合唱し、お互いの健康を祝し来年の再会を約し、拍手のうちに散会した。

なお昨夏、大橋常昌君が長い闘病生活のあと他界され、佐藤二郎、辻原謙三郎の両君が当会を代表し、弔慰を表し香典を供えたことを報告する。

甲子園の健斗祈る

東肥羽城会

今年度支部総会は、三月五日午後五時半より、秋田市川反の第一会館で会員三十二名の出席と来賓として同窓会本部から塩田会長を、また母校より畑沢校長、また野球部より小野監督、竹内部長を招いて開催された。

滞りなく議事を終了した後の懇親会では、久々に春の甲子園球場出場するということで、後輩の健闘を祈って懐かしい応援歌など次々に飛び出すなど大いに盛り上がり、最後に母校同窓会の発展と会員各人の健康を約して、母校の校歌を高らかに唱和して会を締括った。

六年ぶりに 支部名簿刊行

二男鹿二

昭和六十年度男鹿支部総会は十二月七日（土）ホテル諸井に於いて、母校より畑沢校長、児玉ラグビー部前監督、小野野球部監督、桜谷事務局長のご出席をいただき、会員約五十名の参加を得て盛大に開催された。

まず、加藤支部長の挨拶につづいて、秋山幹事長より六年ぶりに整備刊行した支部名簿などについて会務、会計報告などありその後畑沢校長、児玉、小野の各氏より、それぞれ学校の現況の報告と今後のご支援についてお願いがあった。

終って席を畳の間に移して懇親会に入る。

久しぶりの再会に、歓談尽きず、最後に校歌を斉唱し、解散した。

慶祝

（判明分）

◎文部省スポーツ功労賞
小松　誠氏（S44卒）

◎60年度県スポーツ賞
小野地忠次氏（S7卒）
小西玄太郎氏（S27卒）

◎勲二等瑞宝章
大津　英男氏（S8卒）

◎勲三等旭日中綬章
芹田　陽氏（S6卒）
西村　節朗氏（T14卒）

◎勲四等旭日小綬章
塩田　雄次氏（S5卒）

◎勲五等双光旭日章
加賀谷益太郎氏（S2卒）

◎藍授褒章
加賀谷誠一氏（S17卒）
加藤日出男氏（S21卒）

哀悼

（判明文）

羽生　氏義（T4）秋田市 60・12
安藤　重雄（S21）秋田市 60・12
矢荻　清吉（T9）秋田市 60・12
坂本喜三郎（T9）秋田市 60・12
猿谷　節三（T10）秋田市 60・12
菅　鉄平（S10）座間市 61・1
松本　修二（S6）秋田市 61・14
長南　健也（旧職）鶴岡市 61・1
佐々木彦太郎（S10）秋田市 61・1
加賀谷久雄（S19）秋田市 61・1
工藤太刀朗（S7）西仙北町 61・1
尾張　善吉（旧職）横手市 61・2
佐藤日出夫（S57）熱川 61・2
菅原　能生（S29）福島 61・1
小野地忠次（S7）秋田市 61・2
佐沢　正博（S41）神奈川 60・9
三浦　宣男（T12）本荘市 61・2
千葉正二郎（T2）田沢湖町 61・2
大橋　常昌（S26）東京都 60・6
渡部　忠治（S2）秋田市 61・3
奈良淳一郎（T14）秋田市 61・4
皆川　一郎（S7）榛名町 61・4
佐藤清二郎（T10）藤沢市 61・3
加賀谷文治郎（T5）所沢市 61・4
三浦　房雄（S15）金浦町 61・5
荻原賢太郎（S30）秋田市 61・6
丸野内　久（S2）秋田市 61・6
三川　逸郎（T9）東京都 61・5
鈴木　政吉（S10）秋田市 61・6
萬谷忠一郎（S9）大曲市 61・6
伊藤　一男（S5）南外村 61・2
工藤　宏信（S54）秋田市 61・7
酒井　淳（S17）秋田市 61・7

秋田杉・銘木天井板・造作材・規格建具・一般製材・木材チップ・山林経営
加賀谷木材株式會社
取締役社長 加賀谷力司（S9卒）　秋田県五城目町

nitten architect firm
ニッテン設計事務所、株式会社ニッテン
代表取締役　武塙　修（S12卒）
本社　〒102 東京都千代田区平河町1-8-13　和田ビル4F　TEL03-263-7704

秋田魁新報社
常務取締役 広告局長
阿部七郎（S14卒）
〒010 秋田市泉上の町21の3
TEL 六二一四六七七

●信愛病院（215床）
脳卒中リハビリセンター
●信愛の園（150床）
（特別養護老人ホーム）
●信愛デイ・ケア・センター
（入浴サービス
ショート・スティ・サービス
デイ・ホーム・サービス）
桑名忠夫（S12卒）
東京都練馬区西大泉3-14-4
TEL　03(925)6054

古書買入
ふじ書房
藤沢盛之助（S9卒）
秋田市旭南1—18—26
電 62—8792

中村歯科医院
院長 中村　實（S8卒）
秋田市大町四丁目3—14
デンタルビル2F
（大町四バス停前）
☎0188（62）2210

秋高27年卒
定例昼食会
毎月第4月曜日正午より1時まで平安閣にて行なっております。
ご出席下さい。

秋田マイクロ写真印刷㈱
辻　悌五郎（S27卒）
秋田市寺内字蛭根85—69
☎ 23—7161

山寺酒店
山寺慎子（S30卒）
〒010 秋田市山王二丁目二—三
電話二四—一九一〇

秋山皮膚科医院
秋山まり子（S29卒）
〒010-16　秋田市新屋元町21—10
☎ 0188（28）2211

品質一筋/伝統のうまさ
酒王 秀
鈴木隆一（S25卒）
合名会社 鈴木酒造店
仙北郡中仙町長野　☎0175⑥2121

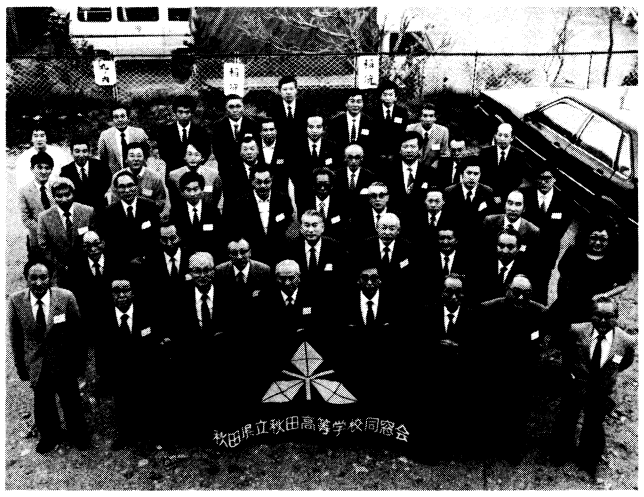
松鳴会
新屋・豊岩・浜田 3地区
旧秋田中・秋高同窓会
事務所　秋田市新屋元町13の33
中野源一（S20卒）
TEL　0188(28)0925

名称は松鳴会に

新屋で二回目の会合

秋田市新屋地区の同窓会が四月十九日午後五時半から、「稲荷」で開かれた。

同同窓会は、昨年新屋を中心に豊岩、浜田地区から通学した人、あるいは卒業後に三地区に居住する人で発足、二回目の今年は約六十人が出席した。



発起人代表の深井博之氏のあいさつで始まり、来賓として出席した塩田雄次同窓会長が母校野球部の甲子園での活躍ぶりと夢中で校歌を歌ったことなど感激した面持ちで披露。また、この春母校に赴任した小徳忠男教頭が校舎改築、進学状況など母校の現況について報告した。

次いで、会の名称を昔懐しい「松鳴会」と決め、会員同士の親睦を深める狙いから今後も世話人で運営することにし、事務所を中野源一氏宅（S20卒、秋田市新屋元町13―33、TEL㉘0925）に置くことにした。

このあと、辻永剛一氏（S11卒）の幹杯の音頭で懇親に移り、例によって校歌や広援歌を次々に歌いまくり、穂積惇氏（S14卒）の音頭による万歳三唱でお開きとなった。

卒業55年を祝う

昭六会　健康の話題に集中

「昭六会」の五十五年記念祝賀会は六月二十一日午後二時から十五人が出席して、あきたくらぶで開かれた。

島田洋治君の司会でまず近藤英夫君が経営するソフト開発研究所完成祝いのあいさつ、さらに横浜から出席の乳井良一郎君、勲三等旭日章受賞の芹田陽君があいさつした。

次いで物故者八十九人への黙祷、庶務報告の後、池田静一君の幹杯の音頭で懇談に入った。

各自の近況報告の後、話題は「病気と死について」に集中。

一病息災で病気したから早く死ぬということはなさそうだとか金婚式を迎える話、子供や孫の話、年をとるにつれて女房に頭が上がらない話など笑いのうずが巻く。

鎌田民治郎君の素晴らしい民謡に喝采した後、全員で校歌を歌い、万歳を三唱、五年後の六十周年記念までがんばろうと誓って散会した。人数が少ない割には充実した心のこもった会合だった。

（森・記）

出席者＝乳井良一郎、池田静一、遠藤三郎、菊地杜夫、鎌田民治郎、芹田陽、菅原作衛、大門美代三、武田基豊、豊口甚平、根田正吉、近藤英夫、島田洋治、阿部武次、森一。

長野からの珍客も

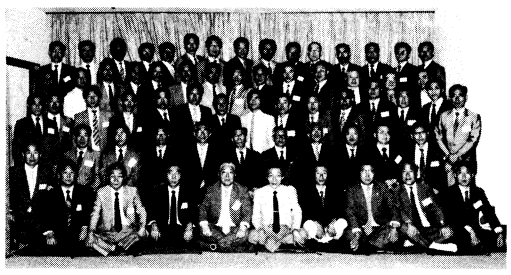
27卒　秋相銀幹事ハッスル

昭和二十七年卒の同期会総会は、六月二十一日午後六時から秋田市「杉のや」で行われた。

「秋田中学」最後の入学生で終戦の翌年である昭和二十一年から中学、高校を通じ六年間一緒に学んだ同期は、毎年六月の第三土曜日を総会開催日とし、幹事も各職場単位で持ち回り交代で担当している。

今年の幹事団は、秋田相互銀行。恩師の鈴木勝三郎、中山健、加藤仁美、大嶋俊平、桜谷吾朗五先生が元気な姿を見せたのをはじめ、出席者は合計六十余人。

同期生の中では、長野県庁に勤める渡部実君が初めて出席したので最近にない盛り上がり。三十余年前の悪童時代の思い出に話がはずみ、時間がたつのを忘れるほどで最後は例によって校歌、応援歌を連発して締めくくった。



（嵯峨　記）

秋田在住者の近況報告

13卒在京同期会　旧懐談にふける

昭和十三年卒、在京同期会は一月二十四日午後六時から新橋「月山」で十四人が参加して行われた。

物故者の冥福を祈って黙祷した後、遠路秋田から参加した菅原繁雄氏の音頭で乾杯。同氏から秋田在住同期生の近況報告、世話人代表辻裕氏のあいさつがあって開宴、美人ママさんのお酌で飲むほどに酔うほどに談論風発、尽きるところを知らず旧懐談に花が咲いた。

午後八時近く記念撮影、恒例により〝天上はるかに〟の斉唱、蛮声をはり上げて再会を約し散会した。

▽写真前列右より左へ＝辻裕、宮田光夫、菅原菊男、一人おいて菅原繁雄、及川満夫。

▽後列右より左へ、平沢哲夫、西田壮吉、加賀谷徳治、皆川宗男、山信田伸二、坂本光彦、斎藤淑夫、早川太郎、佐藤吉治（途中退席）。

（西田　記）

気合込めて校歌を斉唱

横手・平鹿支部

横手・平鹿支部総会は、三月十九日午後六時から農協会館で開催、三十二人が参加した。

母校から畑沢校長、同窓会から京野副会長、桜谷先生の出席をいただいた。

折よく数日後には野球部が春の甲子園大会に出場のため出発するとあって、会は最近にない盛り上がり。全員で歌った校歌もいつになく気合がこもっていた。

急逝の漆芸家惜しむ

＝27年卒　元聖心女子大教授＝

秋田で佐々木英遺作展

日本工芸会会員、故佐々木英氏（元聖心女子大教授）の「漆芸遺作展」が七月二十七日まで秋田市美術館で行われた。

佐々木氏は秋田市出身で昭和九年生まれ。秋高二十七年卒業後、東京芸大工芸科を経て漆芸の道を歩み、日本伝統工芸展で文部大臣賞などを受賞するなど将来を期待されていたが、一昨年五十歳の若さで病に倒れ急逝した。

遺作展は秋田魁新報社などが主催したもので、蒔絵飾筥「萌春」（まきえかざりばこ・ほうしゅん）など代表的作品六十余点が展示された。

会場の秋田市美術館には房子夫人はじめ中・高校時代の同期生、門弟や愛好者など多数訪れ、氏独特といわれる華麗な彩切貝の技法などに感嘆し、若くして逝った漆芸家を偲ぶ姿が印象的だった。

同期生

皆川一郎氏を偲ぶ

花岡泰順（S7卒）

寄り添いて
望遠鏡をのぞきいる
貴兄夫婦を羨ましと想う

これは、あるとき俺が、皆川一郎に書いた下手な歌である。中室田の彼の居を俺は二度訪ねた。東京での卯申会に、彼が姿を見せなかったので、船木茂を誘って訪ねたのが最初であった。大変な喜びようであった。

彼は元来、他人の前で喜怒哀楽などを簡単に表明し得ないけん介な性格であることを知っていた。然し訪ねてみて、横浜戸塚の居宅と同じく、中室田のマンション周囲の樹々を我が家のそれと観じ、小鳥と自然に対する彼の想いを募らせていることを知った。俺もいま、あの頃の高清水グランド近くに住みついているので、きじなどの野鳥が来る。この下手な歌はそんな時、皆川夫婦をふと想いだして、突然はがきに書いてだしたものだ。

二度目の訪問は俺一人でした。高崎から電話した時の彼の喜びかたが今でも耳に残っている。はじめはそんなに喜びを出さない。出せないのである。それが彼が心に秘めた孤高とでも言うべきものの表現形式なのだ。

俺は長い交際の中からそれを知っている。だから「なに、ちょっとお前の顔が見たくてな」と俺も言った。すると彼は、どのバスに乗って、どこで降りて細かいことを言い出す。俺の方向音痴を彼は知っているからだ。

やがて車がマンション入り口に近づくと、手を振っている彼の姿が見える。待ちかねていたのだ。節子夫人とは前回船木茂を誘ってのときが初対面であったが偶然荊妻と同名なので俺にはもう、数年来の旧知のような思いで挨拶した。一郎とは握手したが、互いに淡く浮かぶ涙をかくせなかった。

早速俺が出席した東京での同級会のこと、同級生の動静、ふるさと秋田の変化、互いに秋中生であった時のことなど、話しが次から次へと飛び出す。

彼は昭和五十二年四月に心筋梗塞で一度死にかけたことがある。そのときは俺は行けなくて船木茂に急を報じて彼が見舞っているはずだ。それ以来、酒も煙草も止めていた。なのに俺と対すると、この時だけは飲み出した。

彼に「もう止めろ」と言うと、「―友あり遠方より来る―だ。何をいらんことを言う」と夫人の心遣いも聞かずに飲んでいた。俺は元来酒には弱いのだがこのときは夫人の手料理で快い酔いの中で一泊して別れた。別れの朝、夫人の撮ってくれた二人だけの写真が手元にある。バス停まで送って来て、寒いからもう戻れと言う俺の言葉も聞かず、バスが動き出してもまだ見送っていた。これが皆川一郎と言葉を交わした最後となった。

急を報じる夫人の手紙に俺は為す術を失い船木茂に電話した。四月十三日早朝電話があり、来るなら一日でも早くと言う夫人の連絡を受けたと言う。俺はすぐ秋田を発ち、翌十四日、船木茂に僅かに遅れ彼を群馬大付属病院に見舞った。夫人は船木と俺とが二・三日中に来ることを告げてあったと言う。俺は秋高百周年記念行事役員として貰ってあった古村精一郎先生作詩の同窓会歌を染めた手拭いを、皆川に示して元気ずけた。然しこれまでが一郎の命の火であったようだ。ほぼ二時間後、俺と船木を待ち続けた火は、夫人と俺達二人に見守られて、静かに消えた。午後二時過ぎであった。病因は癌。俺と皆川、中村宗順、芳賀貫一、船木茂とは一つのグループをなしていた。進学をしなかった俺を彼等は来る暑中休暇ごとに訪ねてくれた。中学五年を通して忘れ得ない厚い友情として心に残った。そして宗順、貫一、一郎、の年齢の順に逝った。

後輩の甲子園出場で盛り上がる

近畿支部

紅三点含め48人で

新支部長に石黒氏　毎年開催決める

母校野球部が、二十一年ぶりに春の選抜高校野球大会に出場することになったのを機会に、久しぶりに近畿支部総会が、開会式前日の三月二十五日（火）大林ビル三十階ラウンジセルバで開催された。

その準備のため、まず創立百十周年に発行された同窓会名簿より在近畿地区同窓約三三〇名を拾い案内したところ、幸い一三四名から回答が寄せられた。

会は、神田支部長を初めとして、紅三点を交えて四十八名の出席が得られた。

母校からは、塩田同窓会長、畑沢校長、竹内野球部長、小野監督、桜谷同窓会事務局長の五名が来賓として出席された。

栗谷広（S11卒）氏の司会で会は進行され、神田支部長の挨拶に次いで、塩田会長から就任の挨拶をかねて同窓会の現況を、畑沢校長から学校改築など学校の現況が報告された。その後役員改選で、支部長以下若返り人事が承認された。

石黒新支部長の就任挨拶の中で、野球部の甲子園出場の機会だけでなく、今後は毎年開催して支部の盛上がりを図りたい旨の発言があった。

ついで懇親会に入り、野球部長、監督を紹介、明日の第一戦では是非校歌をと気焔をあげて宴に入った。

各人思い思いに久闊を叙して昔話にふけること暫し、酔が回ると共に往時の青春に返り、歓何時尽きるともなく、三十階から見える夜景もまた光り輝くばかり、明日の必勝を祈って校歌を斉唱、解散する。

幸い同窓各位より計六二八、九五一円の激励金をいただくことが出来、これを三回に分けて母校にお届けした。支部として厚くお礼申し上げます。

新役員は次の通りです。

支部長　石黒次郎（S6卒）
副支部長　小玉保次（S20卒）
幹事長　渡辺良宏（S20卒）
事務局長　嶋田嘉勝（S29卒）

13人の新会員紹介

羽城会　思い出話はずむ

秋田市役所・羽城会総会は去る一月十三日、アキタニューグランドホテルにおいて昭和六十年度の総会が開催された。

会計報告ののち、十三名の新入会員を紹介して議事終了。続いて川井会長あいさつ、その後来賓の高田市長、畑沢学校長、塩田同窓会長、顧問の照井第一助役よりあいさつを頂き、乾杯して懇親会になる。

年々盛会な羽城会であるが、今年は、会員二百三十八名中二百二名出席という多数にのぼった。酒宴での話題も、母校のクラブ活動の活躍、在学時代の思い出など多彩で杯も進んだ。

最後に、校歌、校友会歌などを合唱し盛り上がったなか、万歳三唱して終了となった。

（森本）

つどい

麻雀、早飲み競争も

「三六会」賑やかに新年会

去る一月十二日、昭和三十六年卒の「三六会」の定例新年会が秋田市内の料亭志田屋において行われた。

照井誠司君の市政報告スピーチあり、つぶつぶジュース（ウオッカ入り）のストローでの早呑み競争ありで、大いに盛り上がった。七時すぎに五時間の大宴会の幕を閉じたものの、麻雀する者あり、二次会に流れる者ありで別れを惜しんだ。至急、名簿を整理、完備することと、女性参加者をもっと募ることを申し合わせ、夏の再会を誓って散会した。

（石川清治　記）

甲子園募金に感謝

鹿角　校舎改築状況も報告

鹿角支部の六十一年度総会は六月二十五日午後五時半から、鹿角市花輪の料亭「松屋」で、大里文雄支部長ほか、阿部新鹿角市長、小田島邦夫元校長など校友十九名が出席。本部からは会長代理として沢石広報委員長、学校側から校長代理として小徳教頭が参会して開催された。

当番幹事、大里祐一氏の司会で開会。校歌斉唱、支部長あいさつ、六十年度決算承認、役員改選（全員留任）ののち、沢石広報委員長から「春季甲子園出場寄付金収支報告並びに鹿角支部から寄せられた寄付金の御礼、同窓会活性化の四常置委員会の活動状況、理事役員の増員と年会費の納入状況並びに今後の協力」を懇請。

小徳教頭からは「新校舎建設の進行状況と落成見通し。今春の進学状況と春季各種スポーツ大会の活躍ぶり」などを報告。

阿部鹿角市長の乾杯で懇親会に移り、九時過ぎに盛会裡に閉会。明年度は毛馬内出身者当番で毛馬内で開催することとした。

同窓会本部
沢石　幹事（広報委員長）
学校　小徳教頭先生
小田島邦夫（元校長　花輪）
大里　文祐（T10　花輪）
豊口　甚平（S6　毛馬内）
阿部　新（S12　花輪）
大里　三彦（S13　花輪）
馬渕　清人（S21　大湯）
上野　守（S26　大湯）
西村　英一（S27　大湯）
大里　祐一（S29　花輪）
桜庭　直秋（S34　花輪）
住谷　一男（S36　花輪）
田村　重樹（S36　花輪）
成田　昭夫（S40　花輪）
柳沢　義人（S40　大湯）
松崎　倍（S40　花輪）
大里　和郎（S42　花輪）
金田一悦男（S43　毛馬内）
田村　清司（S43　花輪）

老化気にし記念撮影

62期会　関西からの参加者も

昭和二十三年秋中六二期卒業生と、昭和二十四年秋高一期卒業生を中心に組織する、秋中第六二期会の六十一年度総会は、六月十四日(土)午後三時から、秋田市中通「レストラン・ニューたけや」で盛大に開催された。

参会者は相沢幸四郎君を筆頭に渡部忠雄君など三十八名。東京支部からは山田博通君ほか一名が久し振りの元気な顔を見せ、遠い関西在住の柴田(旧姓桜庭)崇君も出席して古い友情の再燃を一層華やかにしていた。

総会は、広島吾朗君の司会で和やかに進められ、代表世話人笹原秀雄君があいさつし、引き続き同伊藤鉄也君、太田平八郎君の同窓会費の年次別割り当てを含む報告、議事が満場の拍手のうちに承認、決定された。

いささか老化現象を気にしながらの記念撮影後、懇親会。司会志渡和夫君の好リード裡に進展。この日予定していた畑沢校長はあいにくの所用で欠席となったが、小林忠雄同窓会副会長から母校の現状について、スポーツ、勉学、ード・ソフトの各方面にわたって懇切な報告があり、先輩として考えさせられるところがあった。

青春を呼び戻す乾杯の音頭は星野恒夫君。緑の酒を綴るとともに魅える若き日の想い出と熱気で会場は爆発寸前、東京支部から送られた支部総会のビデオに「あいつも老けたなぁ」と同情しながら気持ちだけは三十八年前にプレイ・バック。

歓談と酒はいつ果てるとも知れなかったが、懐旧の情の極まるところ自ら「天上はるかに」の校歌昏にのぼり、再会を堅く約して、名残り惜しくも散会となった。

当日の総会で決定した世話人等は次のとおり。（代表）笹原秀雄、太田平八郎、伊藤鉄也、（世話人）井川一夫、渡部忠夫、広島吾朗、石黒兵四郎、本田和則、佐野謙二郎、原田亮吉、志渡和夫、安田庄一、（監事）石川卓弥、佐藤新吉。

卒業20年記念祝う

S41卒

S41年卒同期会は去る二月二十二日、弥高会館において行われた。

丁度、母校野球部が二十年ぶりに甲子園春の選抜野球に決まった直後のことであった。われら同期も卒業して今年で二十年考えてみれば、我々の代以来の選抜出場ということになるわけで、われわれにとっては、二重にタイミングがよいことであった。

さて、会の方は、同期諸君の出席が六十四名、さらにご多忙の中をわざわざ桜谷、菅原、北条、武田、三船、以上五名の恩師の先生がかけつけてくださった。先生を囲み、あるいは旧友同士、あちこちで話の輪が出来、相手の髪の毛のうすくなったのを冷やかし、腹が出てきたのを指摘されたりで、気持ちだけは二十年前にもどり、しばし談笑がつきなかった。さらに、仕事の都合、あるいは遠方のため出席出来なかった諸君からのメッセージのコピーも回覧されたりで、なつかしく、楽しいひとときであった。

（北嶋　正　記）

時間を大幅に延長

＝大館支部＝

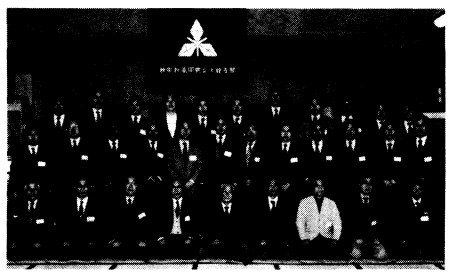
野球部へ寄付を快諾

恒例の大館支部総会は三月六日、北秋クラブで行われた。

同窓会本部より杉渕幹事、事務局の桜谷先生を迎え、歯科医の寺岡洋一君の司会で開会、布袋屋会長のあいさつ後、同窓会の状況、母校の状況について説明があり、会計報告の後、懇談に入った。

途中で二十一年ぶりで春のセンバツ出場の母校野球部のために寄付を提案、出席全員から快諾を得た。

積る話は尽きず、定刻を大幅に過ぎてから校歌、校友会歌を斉唱、再会を約して散会した。



山口インターハイへ
団体4、個人8出場

柔・剣道、ボート、卓球優勝
目下優勝旗10本獲得

昨年の全県新人戦で、二十一年ぶり優勝した硬式野球をはじめ、初の柔・剣・弓道同時優勝で、四年の優勝旗を獲得した母校運動部は、今年にはいって爆発的なエネルギーを噴出。まず中央地区で卓球が一本。インターハイにつながる全県では、柔・剣道、ボート、卓球が四本の優勝旗をもたらし、次いで行われた東北大会で、ボートが二年ぶり優勝して更に一本を加え、計十本とした。個人のインターハイ出場は柔・剣道、陸上が各一名、弓道二名、卓球三名、計八名となった。また文化部では囲碁同好会が五連覇の偉業を達成。東京で行われる全国大会に出場する。

剣道
二連覇なる
佐藤(哲)個人出場

佐藤哲大選手

団体戦は四校で決勝リーグを争い、本校は二勝一敗で秋田南と同率ながら勝ち数の差で首位となり、昨年に引き続き二連覇した。

また個人戦では三年生の佐藤哲大が二位となり全国大会出場権を獲得した。

渡辺明監督は「昨年のメンバーが四人も残っている。春の魁星旗大会でも準優勝し、全国レベルに達しているので楽しみ。夏場なのでこれからのコンディション作りに気を配りたい」と慎重ながらインターハイに向け意欲満々。

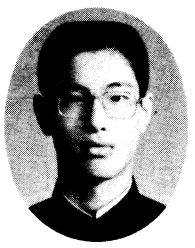
柔道
秋・夏二冠に輝く
伊藤(軽量級)出場

船木賢咲監督談「全県総体において、九年ぶりに優勝し、きたる八月二日から四日まで、山口県徳山市で開催されるインターハイに出場することになりました。

決勝での相手は、七年連続あと一歩のところで、無念の涙を飲み続けてきた経法大附高。しかし作戦見事に的中し、文句の言いようのない大勝利でありました。

今年のチームは一人ひとりが独特の技と力を持っており、しかも毎年必ずあった「穴」がないので、全国へ出てもおもしろい試合ができると思います。ポイントゲッター鳥井の足首骨折の完治もチームには好材料で、これによりチームワークも固まって精神的にも著しい成長をとげました。

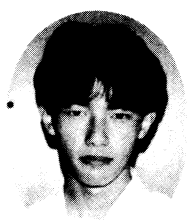
インターハイでの目標はベスト8。一試合一試合納得のいく最高の試合をして、秋田県に秋田高ありということを全国に示してきます。ご期待下さい。


伊藤一選手

弓道
個人、アベック出場果たす
伊藤(女)、東北も制す

渡辺義人監督談「四月より、全県弓道大会、本荘大会とことごとく制し、期待をもって全県総体に臨んだ。しかし、団体戦は、昨年の雪辱ならず、男子三位、女子二位に終わった。だが、個人戦において、伊藤直子が優勝、藤原規行が第二位となり、見事インターハイ出場切符を手中に収めた。男女二名がインターハイに出場するのは十年ぶりのことである。選手達は全国大会で活躍すべく、また来年こそは団体優勝をと新しい体制でスタートをきった。なお、伊藤は東北大会個人の部で母校弓道部に初の優勝をもたらした。」

伊藤直子選手


藤原則行選手

陸上
走高跳でインターハイ
一年生・佐藤真紀子

東北大会は四百Mリレー、千六百Mリレー、走巾跳、走高跳の四種目の出場であった。

特に、走高跳では佐藤真紀子(一年)がウエイト調整に苦しみながらも一M六四を跳び四位に入賞、インターハイへの出場権を得たことは大きな収穫であった。

走幅跳、四百Mリレーは実力発揮できなかったが、千六百Mリレーは準決勝へ進出、好位置をキープしての展開ながらも決勝進出とはならず残念であった。

この実績がチームとしてもインターハイへの道が開けるよう努力した。(大野隆夫顧問)

佐藤真紀子選手

ボート
東北をも制覇し
全国に期待が

福島県営荻野漕艇場で実施された

ボート東北選手権大会に於いてナックルフォアが二年振り三度目の優勝を飾る。昨年からの冬季トレーニングの苦しさを一挙に開花させた。時に決勝ではスタート直前、舵が破損しているのをウォーターマンが発見してくれ、ヒヤッとした瞬間があった。六百近くまで会津にキャンバス差でリードされていたが、ラストスパートで一気に抜き去り一艇身差での圧勝であった。今後の課題はスタートの強化とラスト二百の粘りである。各人がそれぞれ個性味を発揮しつつあるので、今後の成長振りが期待される。

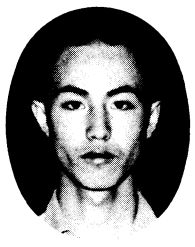
囲碁
全県五連覇
これまた全国大会へ

「一年生のときから二年連続して全国大会に出場している。三年生を中心にして、高校囲碁連盟創設十周年の記念大会に五連覇を達成できてやはり嬉しい。実力は昨年より一段と向上しているので、全国大会でも通用するものと期待している。今年は、三回戦進出を目標にこれからも練習を続けていきたい。個人戦出場の佐々木君の活躍も楽しみの一つである。」　伊藤　仁顧問

卓球
八年ぶり念願の団体優勝
個人も制し、三冠なる

優勝が決まった瞬間、選手たちは小踊りし、抱きあって喜こんだ。観客席で声を枯らして声援を送っていたチームメート、父兄、OB会員の中から、きらりと光るものが落ちた。感動の一瞬であった。

昨年、一昨年と期待されながら果たせなかった念願の全県総体での団体優勝を、八年ぶりに達成した。ずいぶんと長い道のりだった。


斎藤　修選手

渡辺正伸選手

個人でも健闘し、山口市で行われるインターハイには、シングルスで三人、斎藤修(優勝)渡辺正伸(二位)、船木七月(三位)県代表四人のうち)が、また、ダブルスで一組、斎藤、船木組(優勝)(県代表二組のうち)が代表となるという快挙を成し遂げた。ここに至るまでに、一生懸命頑張った選手の努力があったことは勿論ですが、OB会諸氏、父兄等のご支援によるものと改めて深く感謝いたします。

顧問　出口記

船木七月選手

編集室から

「だより」は、活性化のため常置された広報委員会で編集発行しています。発行月上旬に編集会議。二時間ほどカンカンガクガクのの ち、各面の構成と執筆担当を決め、あとはプロの実力で一しゃ千里。

しかしいつも悩みのタネは、賛助広告と「つどい」の記事。ご協力を切望しております。どんなヤツらがやっているのか、関心もおありだろうと思うので、オールスターキャストを紹介するしだい。

前列左から、小林(副会長・広報担当)、沢石(委員長)、信太(副委員長)、辻(同上)、後列左から高橋(学校)、田口(同上)、小林、桜谷(事務局長)、長野、石井。(山寺慎子のみ欠席)。